

日付：2014年 10月 10日（金）学籍番号： \_\_\_\_\_ 氏名： \_\_\_\_\_

## 情報科学

担当：幸谷 智紀（tkouya@cs.sist.ac.jp）

### 課題 2A

以下の文章を A4 用紙 1 ページに収まるようレイアウトして打ち込み、「課題 2A」ファイルを作れ。

#### 本はどのように消えてゆくのか 津野海太郎

『本はどのように消えてゆくのか』（1996年 晶文社）より抜粋

#### はじめに

はたして紙と活字の本はなくなるのか。おそらくなくなるだろう。

ただし私は、いずれは日本語表記から漢字がなくなるだろう、と本気で考えているような人間でもある。いつか、われわれの書く文章から漢字が一つのこらず消えてなくなる日がやってくる。そのころまでには紙と活字の本だって自然消滅しているにちがいない。

それまで百年、二百年、いや三百年か。いずれにせよ遠いさきの話だ。マルチメディアや光ファイバー・ネットワークによって、あすにも紙と活字の本がなくなるかもしれないといった危機意識の盛りあげ方は、ちょっと古いのではないか。そんなにおどかさないでほしい。

遠い将来、もし本がなくなるとしたら、それはどのようにしてなくなるのだろう。紙と活字の本はどんな段階をふんで消滅の時をむかえるのか。

それを考えるには、まず「本とはなにか？」を定義しておく必要がある。いろいろな定義のしかたがあろうが、私としてはまず、本のモノとしての側面に注目したい。私は単純な人間だから単純にいつてしまう。私たちのような日本語人間にとっての本とは、まず第一に、

- (1) 明朝体の文字をタテヨコそろえて組み、
- (2) それを白い紙の上にインクのしみとして定着し、
- (3) 綴じてページづけしたもの。

を意味する。

これらの条件のうちの一つか二つが変化した程度では、本がなくなった、とはいわない。定義上、これらの条件のすべて、つまり本というモノのしくみがまるごと別のものにとつてかわられて、はじめて「紙と活字の本は消滅した」ということができる。

課題 2B

上記の文章を下記のように「2 段組み&縦書き」にしてレイアウトし、ヘッダに「学籍番号・氏名」を、フッタに「ページ番号」を付加したものを「課題 2B」ファイルとして作成し保存せよ。

xxxxxxxx 幸谷 智紀	ヘッダ (学籍番号と氏名)
<p>本はどのように消えてゆくのか<sup>1</sup></p> <p>津野海太郎<sup>2</sup></p> <p>『本はどのように消えてゆくのか』より<sup>3</sup></p> <p>(1996年 晶文社)<sup>4</sup></p> <p>はじめに<sup>5</sup></p> <p>はたして紙と活字の本はなくなるのか。おそらくなくなるだろう。<sup>6</sup></p> <p>ただし私は、いずれは日本語表記から漢字がなくなるだろう、と</p> <p>本気で考えているような人間でもある。いつか、われわれの書く文</p> <p>章から漢字が一つのことろ消えてなくなる日がやってくる。そのこ</p> <p>ろまでには紙と活字の本だって自然消滅しているにちがいない。<sup>7</sup></p> <p>それまで百年、二百年、いや三百年か。いずれにせよ遠いさきの</p> <p>話だ。マルチメディアや光ファイバー・ネットワークによって、あ</p> <p>すにも紙と活字の本がなくなるかもしれないといった危機意識の盛</p> <p>りあげ方は、ちょっと古いのではないか。そんなにおどかさな</p> <p>いではない。<sup>8</sup></p> <p>遠い将来、もし本がなくなるとしたら、それはどのようにしてな</p> <p>くなるのだろう。紙と活字の本はどんな段階をふんで消滅の時をむ</p> <p>かえるのか。<sup>9</sup></p> <p>それを考えるには、まず「本とはなにか?」を定義しておく必要</p> <p>がある。いろいろな定義のしかたがあるが、私としてはまず、本</p> <p>のモノとしての側面に注目したい。私は単純な人間だから単純にい</p> <p>ってしまふ。私たちのような日本語人間にとっての本とは、<u>まず第</u></p> <p><u>一に</u><sup>10</sup></p> <p>(1) 明朝体の文字をタテヨコそろえて組み、<sup>11</sup></p> <p>(2) それを白い紙の上にインクのしみとして定着し、<sup>12</sup></p> <p>(3) 綴じてページづけしたものを。<sup>13</sup></p> <p>を意味する。<sup>14</sup></p> <p>これらの条件のうちの一つか二つが変化した程度では、本がなくな</p> <p>った、とはいわない。定義上、これらの条件のすべて、つまり本</p> <p>というモノのしくみがまるごと別のものにとってかわられて、はじ</p> <p>めて「紙と活字の本は消滅した」ということができる。<sup>15</sup></p>	
1	フッタ (ページ番号)

## 課題 2C

上記は最初の文章の結論に近い部分の抜粋である。「課題 2A」に下記の囲み部分を追記し、「課題 2B」にも追記した部分をコピーして文章を完成させよ。

ページからウィンドウへ

こうした実験がいくつも積みかさねられるうちに、ある日、ふと気がついたら、骨がらみの旧派読書人であるはずの私までが、ディスプレイ画面で、ごく自然に本を読んでいたというような事態が、じっさいに生じてしまうかもしれない。ありえないことではない。そのとき「紙の上に文字列をインクのしみとして定着する」という(2)の条件は、事実として別のものにとってかわられることになる。そうなれば必然的に、(3)の「複数の紙を綴じてページづけしたもの」という条件も大幅な変容をこうむらざるをえない。

(中略)

かくして何十年かのち――。

現在の技術がもっともっと進展していったさきで、いまあるものよりもはるかに扱いやすく洗練されたブラウザやウィンドウ技術が開発されたとしよう。私たちの意識のうちで明朝体柵形組版という規範がグラリと揺らぐ。白い紙の上のインクのしみが薄れ、綴じてページづけしたものとしての本のしくみが次第にその特権性をうしなっていく。この過程に並行して出現するのが、たぶん、つぎのような本、つぎのような読書習慣である。

- (1) ネットワークをつうじてデータを人手し、
- (2) それをディスプレイ画面上にデジタル文字として表示して、
- (3) 複数のウィンドウを切り替えながら読む。

そんなものは本ではない、という立場を私はとらない。もしそれがある程度まで読みやすいものになりうるとすれば、それもまた十分に本のうちなのだ。

津野海太郎「本はどのように消えてゆくのか」

青空文庫 <http://www.aozora.gr.jp/>